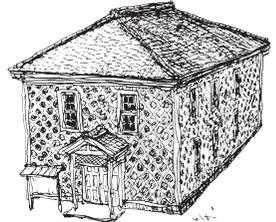


## 演説館



福澤先生とその門下生たちは、西洋のスピーチ、デイベートを研究し、わが国の「演説」を創始しました。三田演説館は、1875（明治8）年に開館した日本最初の演説会堂です。

●常任理事

おくだあきよ  
奥田 暁代

# 多様な「多様性」を目指して

「多様性」ということばが広く聞かれるようになりました。時にはそれは偏見や差別を解消するための方策のようにも聞こえ、数字で表されるに至れば多様性は組織のためにあるようにも見えます。しかし、多様性を形作ることは、全てを包摂するばかりでなく、協力して変化を生み出すことなのです。

海外の大学を例にとれば、「多様性」と言うときは、入学者の人種や民族ばかりでなく、性的自認や指向はもちろんのこと、家庭の収入や両親の学歴、文化的な背景なども含めて語られます。できるだけ「多様な」人たちを受け入れていく、そうすることで、互いから学び取ることが多いと説明されます。多様性が推奨されるゆえんです。しかし、違いを強調するあまりに、また特別視することで、一人一人が持つ多様性を否定してしまっていないか、考えなければなりません。

実は「多様性」ということ自体がとも多様です。そもそも大学はさまざまな意見が飛び交い尊重される場所です。多様な見方は活動経験や読書体験からも生じますし、議論を重ねるこ

とで新しい考えが創造されます。多様性が多様であることを認め、幾重にも意識と理解を重ねていくことで、社会を変えることができるのではないのでしょうか。慶應義塾では、それぞれの持つ多様性がさらに広がるような協生環境を推進します。それは、多様性について一緒に考え、また多様性を認め合うことでの協力することです。

アメリカの詩人マヤ・アンジェロウは、子どもたちには早くから多様性に内在する美しさと力強さを教えなければならぬと書きました。多彩なタペストリーに喩えながら、その色や特徴に関係なく全ての織り糸は同様に価値があり等しく大切であると論じ、そして指し示したのは、違いの根底にある類似です。多様性とはそれぞれを受け入れることであり、違いから全体を束ねるのではなく、個の美しさと強さを尊びながらつながりを深めることではないでしょうか。

慶應義塾の多様性はそのような、「独立自尊」、「社中協力」の精神にも根差したものであることを願い、目指しています。

※ Maya Angelou, *Wouldn't Take Nothing for My Journey Now*